

宅間田・久未(八)小物ノ上(浮)といふ様な用字がある。福母は前記の三雲と共に論すべきものであると思ふ。この三雲と福母はクボに入れずこの部に加算してゐる。大説間は大野島の肥前側の村名であるから、大を除くと説間となる。田隈(早)といふ實例に照してこの部のものと信ずる。それに反して宅間田は田隈田となり、田を重用するわけであるが、田隈が初來の地名であつたのが、その作田の地を田隈田と呼ぶに至れるものと思はれる。その位置する地勢から見ても隈であり、宅間田の東部を久未といふこと

オーベルニュの旅 (二)

本 間 不 二 男

は、之れが傍證となると思ふ。宅間の用字に拘泥したくはない。山門の久未もクマに當てたものと思ふ。訓讀するのが誤りである。樂間も地形ガラ隈であること明瞭である、ラは別述する。小物ノ上は些か無理かと思つたが地形が然う思はれるし、菰ノ上小森ノ上などではなく、近くに西隈ノ上東隈ノ上がある點から見ても、隈ノ上の轉としたのである。これに似たものに小物成(神)があるが本項には加へてゐない。古用字として古事記中卷には石塙^{イシヅマ}などの用字を見るクマも相當の古い語といへ様と思ふ。

(未完)

中央フランス紀行

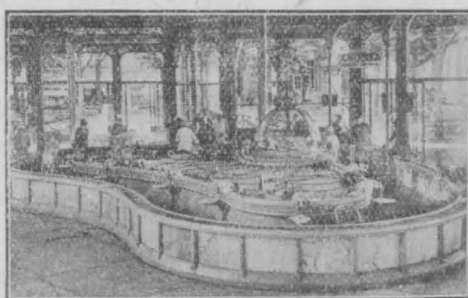
七、ヴィシー 巴里のガール・ド・リヨンを十

オーベルニュの旅

二時五分に出發し炭酸泉で有名なヴィシー(Vichy)に着いたのは十八時一寸過ぎである。湧出口は蔽はれて見る事が出来なかつたが、其の流

出口に於けるものを接待の女より得て口にしたところから判断すれば、略ぼ體温に近い温度を持ち、酸味と少しばかりの甘味を有する炭酸泉であつた。此

第五圖



ヴィシー鑛泉流出口

いたのは廿時半頃であつたと思ふ。夕食が済んだ時にはもう廿二時も過ぎてゐた。

車中同行の一名はニューヨークから初老のビンハム夫人(Mrs. Millicent Todd Bingham)で

處は丁度一行の集合地なるチエール(Thiers)に至る途中の乗換驛に當り、偶々此の見學の機會が恵まれたのである。薄暮更に南行してチエールに着

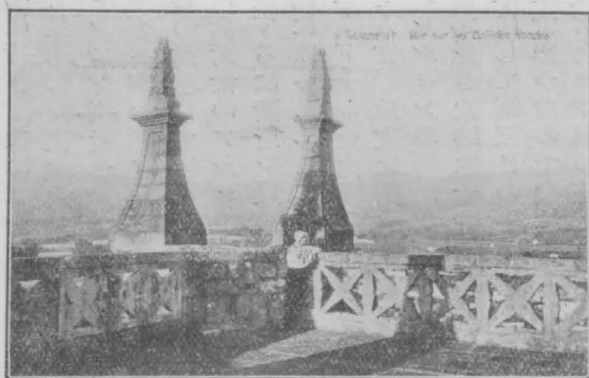
あつた。彼女の語るところによれば、其の父は天文學者で、一八八七年、一八九六年及び一九〇一年に日本に渡行し、彼れと同行した彼女の母は恐らく富士山頂を極めた最初の外國婦人であらうとのことである。又た彼女自身も最終の回到兩親に伴はれて我國に渡來したといふので大いに日本に好感を持ち、終始不案内な筆者を助けてくれたことは非常に幸福であつた。殊に夫人は六年間フランスに於いて地理學を專攻し指導者アルボス教授の説明を英譯する所の勞を取られた一行中の主要な學者であつた事に於いて特に筆者は幸運に恵れた様であつた。

ハ、チエールからアンベルへ 九月八日見學

旅行第一日の朝は七時ホテル・ド・パリに集合といふのだから、眠いのを耐へて、六時半頃朝飯を済ましホテルに集つた。暫らくして白髪白鬚のアルボス教授がクレルモンから乗合自動車で旅裝甲斐々々しくやつて來られた。此の日の午前はチエールに滞在、先づ眺望のよい坂道の一

角に立つて自然及び人文地理の説明が一時間ほ

第 六 圖



アンベル盆地と其の東方山地

どなされた後、同町のナイフ・スプーン・フォーク等の金物製造工場に案内された。チエールは東に古い花崗岩及花崗片麻岩より成る山地をひかへ、西は漸新層の丘陵地及び平地に望み、南北に走る斷層上に發達した小都會である。此處

は山地から來る水の急流奔湍をなして平地に注ぐ所に位し、水車を利用して上述の刃物製造業

製紙業其の他の工業が會て行はれたとのことであるが、今は唯刃物の製造だけが頗る盛大に行はれ他は衰滅して仕舞つた。

午後は一行二十名が二臺の大型乗合自動車に分乗しアスファルトで舗装された坦々たる道路を南々東に四十軒餘り走つた。途中(上部)鮮新世砂礫の丘陵を蔽ふ斷層崖下で、准平原、斷層崖等の説明と共に斷層の成生が(上部)鮮新世層以前にして上部漸新世以後なることが特に注意された。此の斷層を越えて東なる片麻岩地域に入ると共に道は直ちに峡谷の中を走り、南なるアンベル(Ambert)盆地の水を集めた水が、小川ながら、満々として流れ、兩岸の鬱蒼たる闊葉樹林と共に名狀し難い勝景をなしてゐた。其の宿泊地たるアンベルは眞に靜かな平和な村であつた。其の夜田舎宿で純眞な娘達によつてサーブされた食事こそは特にすばらしいものであつたと記憶する。

九、アンベルからクレルモンへ 第二日目も朝七時出發である。先づ東方數軒なる手漉製紙

工場に行き、次にアンベル郊外のメダル製造工場を見學した後、六、七十軒を昨日の自動車でクレルモン迄走つた。途上車を止めて一度はサン・デュール(St. Dier)附近で花崗岩及花崗片麻岩の崩壊して生じた砂の流水に運ばれて堆積した漸新世のアルコース砂岩及び之が古期地塊と接するに斷層を以つてする所の露出を見、第二回にはクレルモン東郊の丘陵上、遙かにプーイ・ド・ドーム火山脈(Chaîne des Puys)を望む所で人文、地文に關する長い説明がなされた。クレルモンの街に入つたのは既に日没後で、夕食が過ぎた時は十時であつた。

幸にして第三日の午前はクレルモン市の自由見學であつたので、筆者は見物を止めて大いに睡眠をとり生氣の恢復をはかつた。

クレルモンは古くよりプーイ・ド・ドーム縣の縣廳所在地であり且つ其の起伏ある地形に恵まれて高雅清爽な市街を形成し、低地は農村生産物の交易市場として榮えたが、再び一八三二年此處に護謨工業の起ると共に市勢大いに伸び、

第七圖



クレルモン・フェラン全景

續業の興隆を伴つて、一八二一年三〇三七九たりし人口が一九一一年に六五三八六となり一九一九年には大クレルモンを建設して人口一七一一人となつた。今日發展途上にある所の中央フランスの一中心都市である。

自轉車
製造工
業より
自動車
製造工
業に移
り、從
つて之
が他の
金屬工
業の勃
興をも
促し、
更に紡

第八圖



プユイ・ド・ドーム登山口

一〇、プユイ・ド・ドーム 第三日の午後は筆者にとつて最も印象の深い日である。午後一時辻村助教授の來り會するに偶ひ相並んで車上に坐し數日振りに日本語を以つて談ずる事が出来た。

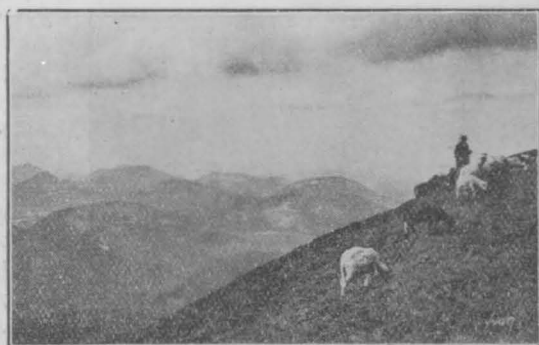
行く手は火山學發祥の地たるプユイ・ド・ドームである。クレルモンを西に出ると最早や總ての風物が火山地質より生じたものであることが直感され、眞に故郷に歸つた思ひがある。溪谷中に流れ入つた熔岩流上に造られた大道を暫らく進むと、やがて斷

層崖を登りつめて曠莫たる高原の上に出て、プユイ・ド・ドームのあの飾り氣ない山塊が直ぐ眼の前に現はれる。

海拔四〇〇米のクレルモンより斷層崖を登れば約八〇〇米の高距に達し、それより緩斜面を登つて約九五〇米の地點に達すれば一の門があり、之より登山専用の自動車道路が始まる。道は開聞岳のそれの如く山腹に螺旋線を描いて山頂（一四六五米）に達する。プユイ・ド・ドームに登山する人は門前の一小舎で道路使用料を拂ひ、自動車で登る人は別に自動車に對する道路使用料をも拂はなければならぬ。

プユイ火山脈中此のプユイ・ド・ドームを除けば一三〇〇米の高距に達するものなく、従つて其の頂上に立つて下瞰すれば數十の火丘は悉く、其の膝下に跪伏し、其の鐘狀をなすもの、伏せたる摺鉢狀をなすもの、伏せたる皿狀をなすもの、火口壁の一方が破れて其處より熔岩の流出するもの、其の他種々なる形態の小火丘が悉く招呼の内にあり、眞に火山の野外陳列場に入つた

第九圖



プユイ・ド・ドームより火丘群を下瞰す

少鋸齒狀をなすものを除けば、阿蘇外輪山にも比較すべき玄武岩臺地の中央に向つて僅に高さを増すのを見るだけである。

我々は山頂なる氣象觀測場の塔の頂上に立つて之を見た。塔の展望臺を圍む手摺りの上には

感がある
而して其
の東、北、
西の三方
は一望坦
々たる准
平原遺跡
であり、

南モン・
ドール及
びカンタ
ールの山
は其の山
頂部の多

水彩畫にした此處からのパノラマが磁器の上に焼き付けられたものがあつて、登山者自から四圍の眺望を理解し得られる永遠の設備がなされてゐる。之は我國に於いて未だ其の例を見ざる所であり、殊に説明圖を磁器とした一事に就き大いに啓發される所があつた。

一、高原を行く プユイ・ド・ドームを辭してその南東麓に至り、多量に花崗岩の岩片を含む有する所の熔滓狀玄武岩の實に貴重なる露出を見た。此の花崗岩片は大は徑數十糎に及び、かつて熱によつて膨脹炸裂せしめられた結果極めて脆弱なる岩石となり、その裂隙に沿ふては酸化鐵が沈澱し、黒雲母は、恐らく水を失ひたる爲めに、分解して酸化鐵となり、其の他の有色礦物も悉く赭褐色の被覆物を被つてゐるのを見た。

夫れより南へ高原を疾走すること七、八軒にしてプユイ・ド・ラ・ヴァンシュ(Puy de la Vache)の火口より流出した既述の橄欖石玄武岩の生々しき熔岩が溪谷に流れ入つて、カシエール、ア

第十圖



サナドアル岩(右)とチユイリエール岩(左)
(モンドール北方外輪山より北方山麓に開く氷河谷)

イダーの二湖となつた所を見學した。再び南々西に車を驅る頃には、たれこめた鈍雲は細雨となり、人影絶えてなき單調な草原の肅條たる中を身に迫る冷氣に戦きながら黙々として進んだ。然し途中早くも一低地に於いて氷河問題が議

論された。それは堆石を含む小丘が氷河の末端に堆積した堆石丘か堆石の氷河より發した急流によつて運ばれて此處に達したもののかの問題であつた。後説を持して指導者アルボス教授に一論を試みたのはフィンランドより來たタンネル(V. Tanner)教授であつた。此の氷河問題についてはこちらより旅行の終る迄ストックホルムから來たヂール(Sten de Geer)教授も加つて常に活潑に議論された。

夕刻モンドールの山中に入るに先つてプユイ火山群六十坐の火丘がプユイ・ド・ドームに率ゐられて偶々霽れ渡つた高原上に端坐するの大景觀を眺めた時は眞に惜別の哀愁身に迫るを覺えた。モン・ドール火山北方の火口壁直下に發し北方に開いた氷河谷と氷蝕によつて残されたサナドアルの岩(Roche Sanadoire)を見たのは其の後間もなくではあつたが、もう殆ど夜に入つてゐた。

一二、モンドールからプユイ・ド・サンシーに登る。モンドールの温泉療養地として古來有名

なことは何人も知る所である。本誌第二卷一號なる「温泉號」には此の地に永く滞在せられ、湖沼の研究を行はれた子爵田中阿歌麿氏の優れた記事がある。

翌朝早く辻村氏に誘はれるまゝに出でて清冽掬すべき小川のせゝらぎを聴く間もなく、はや出發の時間になつた。行く手は名にし負ふモンドールの名山ブイ・ド・サンシイ (Puy de Sancy) がある。廣い氷河谷の中を數軒自動車で上つた後、徒歩一時間半程にして一氣にサンシイの頂上に上りつめて仕舞つた。モンドールは海拔略ぼ九〇〇米、自動車を下りた地點が一八〇〇米には決して達してゐない。それより一八八六米の頂上迄一度の休憩もなしに上りつめた西洋人の健脚は實に嘆賞すべきものであつた。同行者の中には日本で言へば全く老齡に屬する六十を越えたと思はれる婦人もあつたが、頂上に達して少しも疲勞の色を見せぬのには全く驚嘆の外なかつた。

道々筆者は流紋岩より始つて次第に鹽基性の

第十一圖



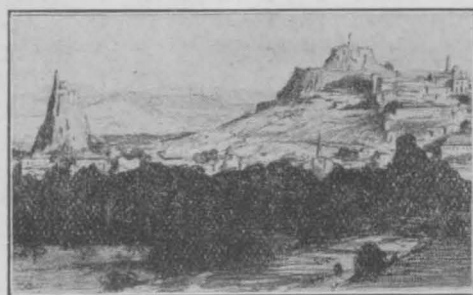
ブイ・ド・サンシイ

頂では此處より稍放射狀に走る數條の見事なる岩脈(トラキ安山岩)を見た。脚下は山又た山の重疊する處である。

一三、モンドール火山南西麓 地形的にはカル其の他の氷蝕地形の中を歩いた事が特に我

玄武岩となり、山頂部で再び白色のトラキ安山岩となつた第三紀火山の斷面を観察した。山

第十二圖



玄武熔岩臺地と
火山頸(モンドール火山南西麓)

々の體驗を増した事になる。

モンドールに歸つて中食を濟せた後、一行は此の火山の西側より南側に廻り、夕刻リオメモンターニュ (Riom-ès-Montagne) に着く迄初めには火山岩頸上に古城のある地質教科書の挿圖で見慣れたあの優れた風景や美しい玄武岩の柱状及び板狀節理、玄武岩熔岩の浸蝕殘丘、氷河谷等應接に暇ない程興味ある地質學上の現象を見

物してボール (Ball) に着いた。此の地の西側には片麻岩結晶片岩等の古い基盤中に幅二、三軒長さ一〇〇軒を越える古生層

の脈狀分布を生じた大斷層があつて、北北東、南南西に丁度ブイ・ド・ドーム火山脈と平行して走り、地形上に稍其の痕跡を残してゐる。

ボール南方で再び氷河問題が議論された後、東行して、途中一水力發電所を見學し、其の地形、植物景觀等の中央日本の山地に酷似する處を通過し故郷の旅を想ひ出した。此の優れた風景は全行の外國學者の中日本を知る人にもそれを想ひ出させ、我々に此の景色の日本のそれに似てゐる事を話しかけさせた程であつた。

ボール以後リオムに達する迄我々の溯上つた谷は深い峽谷をなすも、殊にリオムに入る直前二、三十分の間は宛も天龍峽附近の地形の如く平坦面中に深く峽谷が穿たれ、強い谷底浸蝕の行はれつつある若い谷であることを示してゐた然るに其の上流なるリオムは廣濶なる盆地狀の地形をなす處に位置し、宛も峽谷を溯上つて桃源の仙郷に出た思ひをさせた。

然し翌朝停車場の側にある巨大なるチーズ製造工場に導かれて殆ど堪へ難いあの臭氣を嗅が

された時は仙境も亦た頗る臭いものだと思はざるを得なかつた。

一四、カンタールのプイ・マリー 此の見學を了つた後、我々は最後の大目標プイ・マリー(Puy Mary)に向つて南へ廣く標式的氷河谷を上つた。

此の廣いU字形の谷の中に今日は甚しく蛇行する小川が流れ、其の兩側の懸谷には飛瀑が懸つてゐる。殆ど谷の盡きる處から自動車は羊腸の如き曲路を登つて山梁に出た。此のカンタールの中心から四方に放射する數多の尾根は其の中心に近づくに従つて斷面がV字を逆にした様な峻しい山貌を呈し、其の麓に至るに従つて山頂部に平坦面が開け、中心より一五籽乃至二〇籽の邊に至れば曠莫たる玄武岩の熔岩臺地をなす。即ち火山の受ける浸蝕作用の標式的なる例を我々は此處に見る事が出来た。但し之は氷河の作用によつて生じたものであつて、單に雨水のみでは山頂部の谷の密度が更に多く、且つ谷は最後迄山頂部でV字をなすべきであるから、

茲に見る様な丸鑿で削り取つた様な粗削りな彫刻は、爆發火口附近の脆弱な物質が早く洗ひ流れる様な特別の場合の外は生じ得べくもない。プイ・マリーの山頂に立つて我國の種々なる火山を廻想した時、筆者の頭中を實に幾つかの火丘が往來した。

カンタールの玄武岩アスピートは直徑七〇籽にも達すべき大火山であつて、嘗て其の中心に直徑略ぼ七籽にも相當すべき火口原の生じた事は放射する支脚の中心を求める事によつて明かに示される。此の火口原或は火口壁附近に主體よりも酸性なる中央丘群の噴出した事は最も明らかであつて、我々の登攀したプイ・マリーは殆ど白色とも言ふべき粗面岩より成り溫泉火山群中の前山の熔岩に酷似する肉眼的外觀を與へてゐる。カンタール火山の最高點プロム・デュ・カンタール(Pomb du Cantal)(一八五八米)は外輪山の東壁に位し、次高點プイ・マリー(Puy Mary)(一七八七米)は外輪山の北西壁に位してゐる。而して地形學的にも地質學的

にも最も興味あるは此の次高點附近であり、且つ此處は亦た交通の便に恵まれ、自動車道より登攀すること二〇〇米足らずにして山頂を極める事が出来たので一行は此處で大いに有効なる見學をなすことが出来た。

プニ・マリーを辭して午后一時過ぎ、デエンヌ (Diènné) で晝食を取り、此の地方の農家の内部構造を視察したる後、玄武岩の臺地を一路サン・フルーヌ (Saint Flour) に疾走した。途中ユセル (Ussel) で中世代のカソリック寺院を見物したが、それより我々を悲嘆に誘つたものは三十七名の歐洲大戰の戦死者の碑であつた。此の村は戸數數十の一寒村であつて、然も此の如く戦死者を出してゐる。歐洲大戰の悲しみは斯くして未だ〳〵佛蘭西の國內に充ちてゐる。實に戦争の神に呪ひあれだ。

一五、最終日 翌日はサン・フルールからクレルモンへ。もう我々の旅行も此の日で了へるのだ。朝、サン・フルール郊外の小丘に立つて南東に見える北西南東走の斷層地形について議

論があつた。カンタール火山地域が其の火山活動の後圓形に沈降した事は阿蘇火山噴出後緑川以北が圓形に沈降した狀況と似てゐる。但し其の量はカンタールに於いて遙かに小であらう。

サン・フルールの北西郊で筆者を最も驚ろかした事は漸新世の流水による花崗岩砂の堆積砂層が我國で言へば洪積世に相當する様な新鮮さで道路の側に露はれてゐた事である。此の層は堅固なる花崗片麻岩の基盤によつて褶曲作用から保護され、又た上に中新世の玄武岩を戴いて上方からの固結物質の供給を絶つたので此の如く新鮮なのであらう。

我々はそれから堆石の小丘が谷中に堆積するのを見た。又た火山岩頸も見た。その後我々の走つてゐる谷の兩側には白い花崗片麻岩が露出し、山頂が玄武岩で蔽はれてゐる事實を確めた。晝食の二時間餘を除き一行はひたすらに馳走した、そして午后には雨の中をアスファルトで舗装された坦々たる大道を一〇〇軒近く走つてクレルモンに就いた。

翌朝はクレルモンからパリへ、一行の各人は夫々の回想を抱いて、火山の黒土から白聖の

都へ、汽車の走るまゝに運び込まれた。

(完)

伊 太 利 と こ ろ ぐ (三二)

瀧 川 規 一

〔フ市の畫僧バルトロムメモの習作時代〕 畫僧バルトロムメモが信仰に専念せんと欲して畫筆を執ることを一旦斷念したが高僧の勧誘によつて再び筆を執り始めたのは一五〇四年であつた。この年はラファエルがフロレンス市に來て畫僧の「最後の裁判」の繪に感心した年である。ラファエルは筆者の畫僧を探し出してその美しき繪具の秘訣を學び油の使用法を習得せんと欲した。ラファエルの描いたものにこの畫僧の影響を看取し得る所以は其處にある。例へばペルヂア市のサン・セヴェロ (San Severo) 寺にある

ラファエルの壁畫及びフ市サンタ・アントニオ (S. Antonio) 寺にあるマドンナ像の如きは慥にその影響を看取することが出来る。木炭を用ひて下繪を描くこともラファエルはこの畫僧から學んだのである。反之、畫僧も亦ラファエルの影響を受けた。例へばフ市サン・マルコ寺の熱烈なる説教僧サヴォナローラの獨房の「基督を抱くマドンナ」は畫僧の筆になるものであるがこれを獨乙のミューンヘンにあるラファエルのカサ・テムピ・マドンナ (Casa Tempi Madonna) に比較して見る時畫僧が受けた影響を知ることが